



諸宗教の連帯による 傷ついた世界への奉仕

コロナ危機とその後における

省察と行動を求めるキリスト教の呼びかけ



**World Council
of Churches**

諸宗教の連帯による 傷ついた世界への奉仕

コロナ危機とその後における
省察と行動を求めるキリスト教の呼びかけ

教皇庁諸宗教対話評議会

世界教会協議会



諸宗教の連帯による傷ついた世界への奉仕

コロナ危機とその後における省察と行動を求めるキリスト教の呼びかけ

Serving a Wounded World in Interreligious Solidarity:

A Christian Call to Reflection and Action During COVID-19 and Beyond

教皇庁諸宗教対話評議会（PCID）と世界教会協議会（WCC）による共同文書

@ 2020 WCC Publications/PCID 著作権所有

非営利目的の複製に限定された上で複製が認められる場合があります。

その他の目的で使用される場合は、恐れ入りますが下記へご連絡ください。

publications@wcc-coe.org; dialogo@interrel.va

日本語訳は、日本キリスト教協議会（NCCJ）の協力のもと、日本カトリック司教協議会（CBCJ）諸宗教部門が行いました。聖書引用は、（財）日本聖書協会『聖書新共同訳』（2016）を使用しています。

Cover design: Sister Judith Zobelein, FSE

(Pontifical Council for Interreligious Dialogue)

Book design and typesetting: Beth Oberholtzer

ISBN: 978-2-8254-1737-9

World Council of Churches
150 route de ferney, P.O. Box 2100
1211 Geneva 2, Switzerland
<http://www.oikoumene.org>

Pontifical Council for Interreligious Dialogue
Via della Conciliazione, 5
00120 Vatican City
www.pcinterreligious.org

目 次

まえがき	4
現在の危機.....	6
希望によって支えられる連帯	8
諸宗教連帯のための土台	9
原 則.....	11
提 案.....	15
結 論.....	17

まえがき

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）パンデミックに苦しむ世界にあって、人を愛し、人に奉仕するとは、キリスト者にとってどのような意味を持つのでしょうか。このコロナ危機にあって、世界教会協議会（WCC）と教皇庁諸宗教対話評議会（PCID）は、イエス・キリストに従う人々に、隣人を愛し、隣人に奉仕するよう呼びかけます。その中でわたしたちが重視するのは、異なる宗教を信じ実践している人や特定の宗教には属していない人とも、連帯してそれを行うことの重要性です。

この共同文書の目的は、諸宗教の連帯に向けたキリスト教的土台を提供することです。連帯は、すべての教会のキリスト者のうちに、COVID-19 パンデミックだけでなく他の多くの傷を負う世界のために奉仕したいという思いを起こさせ、確かなものとすることができます。主にキリスト者に向けられたものですが、それぞれの宗教の教えに基づく同様の考えから、既にこの危機に対応しておられる方々にも役立つことを願っています。このパンデミックに対応するという地球規模の課題は、エキュメニカルや諸宗教に対する意識を高め、相互の協力関係を推し進めるよう求めています。

善いサマリア人のたとえ話（ルカ 10:25-37 参照）は、「わたしたちは誰を愛し、誰を思いやるために呼ばれているのか」という問いについて省察する助けとなりますし、「奉仕」と「連帯」ということばに込められた複雑な意味についてヒントを与えてくれます。隣人を愛しなさいという掟に関連して、イエスはこのたとえを語ります。ある人が傷を負い、道端に置き去りにされていましたが、彼と同じ宗教共同体に属する仲間たちは助けることもなく通り過ぎて行きます。ようやく立ち止まってその人を助けたのは、宗教に関するアイデンティティ、正しい礼拝方法、政治問題に参加する権利などで、負傷した人の共同体と何世紀にもわたって争ってきた共同体、サマリア人の一人でした。苦しんでいる人への奉仕や連帯には、境界を越えることが必要だということを心に刻むよう、この物語はわたしたちに伝えています。また、わたしたちが抱きやすい否定的な思い込みに打ち勝ち、このサマリア人のように、「他者」が奉仕と連帯の真の意味を教えてく

れることを謙虚に認め、感謝するよう招いているのです。

このたとえ話は、COVID-19 パンデミック、宗教的不寛容、人種差別をはじめとするあらゆる差別、経済的不公平と環境的不正義、その他多くの罪によって傷ついた世界で、どのように生きるべきかを考えるよう、キリスト者に求めています。わたしたちは自らに問う必要があります。「傷ついているのは誰か、わたしたちは誰を傷つけ、無視しているのか」と。そして、「わたしたちはどのような行為のうちにキリストのようないつかしみを見て、驚きうるのか」と。この物語を通してわたしたちは、苦しみを和らげ、多元的な世界で癒やしと一体性を回復するよう努めながら、奉仕する相手に対しても、ともに奉仕する人々に対しても、宗教的偏見と文化的先入観を捨て去るよう求められています。同時に、傷ついた人に救いの手を差し伸べる予期せぬ「他者」サマリア人がキリストご自身だと気づくとき、この物語を通して、信仰とそれに基づく生き方の中心である希望を与えられるのです。

現在の危機

COVID-19 パンデミックは、前もって準備することも避けることもできないような速さで、国際社会に影響を与えました。それは人々の日常を劇的に変え、すべての人間が共有するもろさを露わにしました。非常に多くの人々が感染する一方で、それ以上の人が、精神的、経済的、政治的、宗教的な影響を受けています。すべての人が公の礼拝の場を奪われました。人々は、死や深い悲しみ、特に臨終の床にある愛する人のそばにすることができず、臨終の祈りも葬儀も当たり前に行うことができないという状況に、懸命に対処しようとしています。都市封鎖は世界経済を悪化させ、この大惨事によって、世界の飢餓は倍増する可能性があります。また、家庭内暴力も増加しています。フィジカル・ディスタンシングやソーシャル・ディスタンシングが求めるものは、多くの人にとって孤立を意味しています。絶望、心配、不安が生活を支配しています。このコロナウイルスは、貧富、世代、住居地、職種などの違いに関係なく、すべての人に影響を与えています。

全人類が重い傷を負う中、このパンデミックは、富む者と貧しい者、特権を持つ者とそうでない者との、残酷なまでの格差を再確認させました。多くの場所で、病人、高齢者、障がい者がひどく苦しんでいるのにもかかわらず、ほとんど、あるいはまったく治療が施されない状況もしばしば見られました。人種差別はさらにひどくなり、支配者層が長期にわたって脅威と見なしてきた人々に対する暴力は、国家を構築し維持してきた不平等、排他主義、差別、支配のシステムによって、増加する一方です。周縁に追いやられた人々、特に移住者、難民、受刑者は、このパンデミックの影響を最も受けています。

この COVID-19 パンデミックに伴う人類の悲惨な状態は、地球の苦しみという、より広い状況の中で起きています。苦しんでいる人間の声だけでなく、COVID-19 後の世界の経済的影響によって悪化する可能性のある、地球とそこに生きるすべてのいのちの叫びも聞くよう、多くの人々が訴えています。またこの健康危機は、気候変動と生物多様

性を脅かすものに関連する将来の危機の前兆でもあります。わたしたちの世界をより効果的に守るためには、被造物のうめきに耳を傾けながら、意識においても行動においても、早急にエコロジカルな回心をする必要があります。

わたしたちが共有するもろさへの意識の高まりは、あらゆる境界を越えて到達する新たなかたちの連帯への招きとなります。この危機にあって、自分自身の健康に危険が及ぶことも顧みず、相手がどのような人であるかも関係なく、力を尽くしている医療従事者と奉仕しているすべての方々に、心から感謝します。ボランティアや慈善活動を通じて、助けを必要としている人との連帯に向けた喜ばしいしるしも見られます。キリスト者、そしてすべての信仰者と善意ある人が、いたみをともにする文化を築くために協働し、個人としても組織としても、助けを必要としている人や弱い立場に置かれている人に、物的・精神的・霊的な支援の手を差し伸べていることを、喜ばしく思います。なぜなら、わたしたちは一つの家族であり、互いは兄弟姉妹、共通の家である地球にともに暮らす者だからです。わたしたちの相互依存関係は、誰も自分で自分を救うことができないことを思い起こさせます。今こそ、COVID-19後の世界を再考するために、新たな連帯のかたちを見いだす時です。

諸宗教間のつながりは、連帯を表明し構築するためにも、自分の限界を超えたところからもたらされる助けに心を開くためにも、力強い手段となりうるのですから、わたしたちはキリスト者として、すべての信仰者や善意ある人とどのようにして連帯することができるかを考えなければなりません。連帯に向かうこの旅路の中で、さまざまな共同体は、わたしたちがそれぞれの伝統のうちに見いだす希望によって力づけられ、支えられているのです。

希望によって支えられる連帯

すべての人には希望と夢があり、希望は、どんな困難にあっても生きようとする意志を支える力となります。キリスト者としてわたしたちは、神が約束された王国——正義と平和のうちに被造界全体が和解し、一つとなる国——を待ち望んでいます。この希望はわたしたちの生き方を変え、この世界を超越したものへと向かわせると同時に、キリストに従ってこの世界とその繁栄に奉仕するようわたしたちを導きます。ですから、すべてのキリスト者は、正義と平和によって一つに結ばれた世界というわたしたちの希望を実現するために、他の宗教を信じる人々と協力し、ともに働くよう招かれています。さらに広く言えば、わたしたちは、よりよい世界のために善意あるすべての人とともに働き、希望をもたらす人となるよう求められているのです。

希望は、すべての宗教の本質的な特徴です。宗教における希望が、悲劇的な状況に苦しむ人々を愛といつくしみをもって世話するよう信者たちを促してきたことは、歴史が語るとおりです。今日、パンデミックで荒廃した世界に新たな希望をもたらすためには、普遍的で共通の倫理的および霊的価値観が必要です。この点において宗教は、地方・地域・国・国際レベルで新しい社会秩序を構築する際に、人間性を目覚めさせ導くための貴重な貢献をすることができます。この新しい視点は、人類家族の団結、およびすべての人間に共通する受け継がれてきた倫理観に基づく必要があります。今日、COVID-19後の世界に奉仕し、癒やしをもたらすために、共通した宗教的および倫理的価値観に基づいて、地球に対する責任を引き受けるようわたしたちを促す、地球規模の相互関連性があります。わたしたちは、特にわたしたち自身、家族、わたしたちの町と国、そして被造界全体が負っている深刻な傷に応えながら、再び世界と関わるよう求められています。

諸宗教連帯のための土台

わたしたちキリスト者にとって、諸宗教連帯のための土台は、父と子と聖霊という三位であり一なる神への信仰です。

1. すべての人間は、父である唯一の神の被造物であり（創世記 1:26-27 参照）、同じよい計画にあずかるものです。わたしたちは、愛によって、そしてだれもが等しく有する尊厳によって結ばれた兄弟姉妹です。ですから、唯一の創造主によって結ばれ、神の像として造られた一つの家族として、互いに対して責任を負っています。そのことに気づくときわたしたちは、すべての人間の尊厳を守り、そして取り戻しながら、この世界で神の癒やしの愛の道具、顔とならなければなりません。互いを思いやり、互いの幸福に責任をもつことへの障害を取り除くことで、わたしたちを似姿として造られたかたを称えます。善いサマリア人が示すように、この連帯は普遍的であり、境界を越え、全人類を対象としています。わたしたちの根本的なつながりと共通の起源は、人間が生みだした相違よりもはるかに重要なのです。
2. わたしたちの信仰と希望は、ご自身の傷によって癒やしてくださるイエス・キリストのうちにあります（I ペトロ 2:24 参照）。イエス・キリストにおいて、わたしたちは困難に直面しても、確かな根拠のある希望を失うことはありません。イエスはその犠牲の中で、本来「ともに苦しむ」という意味のいつくしみを、わたしたちの理解を超える愛のうちに、癒やしの極みまで高めてくださいました。わたしたちはキリスト者として、同じ癒やしをもたらず「ともに苦しむこと」へと招かれています。わたしたち自身の癒やしもイエスの愛に依存しながら、その愛を伝えるものとなるのです。善いサマリア人が示したいつくしみによって、わたしたちは彼のうちに、この世界の傷を癒やしてくださるキリストの姿を見いだすことができます。苦しんでいるすべての人への思いやりといつくしみの徳は、他の宗教にも豊かに見られますし、実際、最も困窮する人に対する配慮や寛大さのすばらしい模範となっています。
3. わたしたちは、傷を負い道端に置かれた人のうちにもキリストを見いだします。苦

しむ兄弟姉妹のうちに、苦しむキリストの顔と出会います(マタイ 25:31-46 参照)。
キリストが全人類とともに苦しんでいることを知ったわたしたちキリスト者は、苦しむ人すべては尊厳と癒やしの望みを等しく持っていることを認めるよう招かれています。「これらの小さな者が一人でも」(マタイ 18:14)、置き去りにされてはなりません。わたしたちにとって、苦しむ人とのイエスの連帯は、根本的であり同時に変革をもたらすものでもあります。世界の傷を完全に受け入れ、他者の傷から距離を置くことを許さず、それを引き受けるのです。しかし、イエスが死者の中から復活されたことで、この連帯はまた、すべての人にとって新たな在り方を示すこととなります。復活は、愛がどんなに深い傷よりも強く、死が終わりではないことの証明であり、保証なのです。

4. わたしたちが他者と連帯するとき、わたしたちは聖霊の働きによって繋がっています。聖霊は「思いのままに吹く」(ヨハネ 3:8) のです。善いサマリア人のように、わたしたちが他者、特に困っている人に目を向けるとき、神の働きを目の当たりにして、わたしたちは驚き、謙虚になることでしょう。祈りのうちにわたしたちを神に向かわせ、奉仕と連帯のうちに隣人へと向かわせる霊的な力として、聖霊は特別な仕方で、信仰をもつすべての人とわたしたちとを結びつけます。聖霊はわたしたちに、人々を成長させるためのたまものを与えます。わたしたちのうちに、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制の働きを生みだし、うぬぼれや挑戦、ねたみの道から遠ざけるよう促します(ガラテヤ 5:22-23, 26 参照)。世界中によい知らせを宣べ伝え、苦しむすべての人を助けるキリストの手となるよう、わたしたちを遣わされるのもまた、聖霊なのです。

原則

この道とともに歩むことが重要であるというわたしたちの信念は、WCCとPCIDがこの文書とともに書いたという事実には反映されています。その構想のプロセスと内容の両方が、他の宗教を信じる人々と対話するという、キリスト者としての責任と心を開く姿勢を反映していると信じています。次に述べる原則は、傷ついた世界にあって、すべての信仰者と善意ある人とともに互いに奉仕し合う、わたしたちの指針となるでしょう。これらの原則は、わたしたちが共有する父と子と聖霊の神への信仰と、全人類に対する神の計画に由来しています。

1. 謙遜と弱い立場に身を置く——キリスト者は、主とともに謙虚に歩み（ミカ 6:8、マタイ 11:29 参照）、キリストの苦しみと世の苦しみを進んで分かち合うよう招かれています。「勇気と思いやりをもって」心を開くことで、証し（witness）を生きることがともにあること（with-ness）だと学びます。このような謙遜と弱い立場に身を置くことで、キリストとその犠牲的な愛の模範に倣い、キリストのうちに、自分の可能性を最大限に発揮するのです（フィリピ 2:5-11 参照）。おごりと、他者に心を開いて成長できないことこそが、分裂を生み出し恒久化させる事態にわたしたちを陥らせています。神と格闘したヤコブのように、祝福を受けるためには、傷つくことを恐れてはなりません（創世記 32:22-32 参照）。権力に対して真実を語ることで、また不正義に苦しむ人々のために声を上げることで、弱い立場に追いやられることがあります。わたしたちはまた、ゆるしの土台は正義であると信じています。正義なしに争いは解決しません。わたしたちは、イエス・キリストの無私犠牲に倣い、正義を求めていのちまでもささげてきたキリスト者たちの長い伝統のうちに立っています。
2. 尊重——わたしたちキリスト者は、各個人に固有で複雑な状況と、その人々が自らのストーリーを語る権利を尊重しなければなりません。わたしたちは人々を、わたしたちのストーリーの対象としてではなく、その人々自身のストーリーの主体として扱うように、また、心身の健康、国籍、所得、性、肌の色などの事柄に関して、

その人々の権利と自由を脅かすものと戦うように招かれています。その中で、わたしたちは神を証しするのであり、その神の啓示が、特定の時、特定の場所、そして人となられたイエス・キリストにおいて（ヨハネ 1:14 参照）、人類全体と、すべての人間が神の像として創造されたことを明言しているのです。ですからわたしたちは、富む人と貧しい人、男性と女性の間も含め、いのちや自身を語る権利が抑圧されている人々と緊密に話し合い、協力しながら、あらゆるところで生じている格差と不平等をなくすよう取り組まなければなりません（マタイ 7:12 参照）。

3. 共同体、いつくしみ、共通善——これらの価値観は、わたしたちがこの世界と関わるための土台となります（マタイ 5:7 参照）。人となられたイエス・キリストを通して神がそうしたように、わたしたちも、人間の生の複雑で痛みを伴う現実を受け入れるよう呼ばれています。わたしたちが自分の人間性を十分に体験できるのは関係性においてだけですし、他者を愛し、そのいたみを分かち合うことによって、神が意図し、イエス・キリストの模範のうちに啓示された方法で、わたしたちは真の人間となるのです。連帯の原動力は、公正で包括的な共同体を築き、いつくしみを育み、共通善を促進させることにあります。そのためには、除け者にされて「門の外」（ヘブライ 13:12）に置かれた人々と苦しみを分かち合うことで、イエスが受け入れた世界の傷にもっと注意を払わなければなりません。
4. 対話と相互の学び——この危機の時代に、わたしたちはお互いに学び合うよう呼ばれています。さらに、学ぶことは何もないとわたしたちが思い込んでいる人たちを通してさえ、神は教えてくださるということを、わたしたちは受け入れるべきです（使徒言行録 11:1-18 参照）。貧しい人や傷ついた人は、しばしば、重要な教訓や贈りものを与えてくれます。わたしたちは皆、自分のうちにある貧しさと傷を認める必要があります。わたしたちは他者の人生を変えようとしているのですから、それと同じくらい、自分の人生も変えられる準備が必要です。例えば、難民や移住者を迎え入れるなら、その人々も、その人々を受け入れる共同体も、変わることができます。苦しむ人や弱い立場に置かれている人のうちに、神のわざに出会う機会があります（ヨハネ 9:2-3 参照）。すべての人は神にかたどり、神に似せて造られたのですから、人は誰でも神の姿を映し出すことができますし、神の愛を他者に示すようにとの招きにどのように応じるかという問いに答えることもできます。

5. 悔い改めと刷新——癒やしと一致に向けた役割を担うために、わたしたちキリスト者は、多くの人の苦しみを悪化させる抑圧体制のもとで、自分たちが担った犯罪的な行為を認めなければなりません（サムエル下 12）。神が赦してくださることに信頼しながら、罪によって傷ついているわたしたち自身が、他者、もっと広く言えば神が創造されたすべてのものを、どのようにして傷つけてしまったのかを問う必要があります。母なる大地と苦しむ兄弟姉妹の叫びに耳を傾けなければなりません。悲しいことですが、わたしたちは共同体として、わたしたちの中でもっとも弱い立場に置かれている人を傷つけたという虐待の歴史があることも認めます。苦しみに加担したと告白することは、わたしたちがより正しい生活を送ることを可能とする、真の刷新への出発点となります。このような自己批判的な省察は、貧しい人をその貧しさゆえに、傷ついている人をその傷ゆえに非難しようとする誘惑に打ち勝つようにしてくれます。それはまた、神がその人の価値や行動に基づいて、ある人を成功させ、ある人を苦しめているという考えを否定し、沈黙と中立によってわたしたちが暗黙のうちに永続させてきた不正の体制を克服するのに役立ちます。
6. 感謝と寛大さ——キリスト者は感謝と寛大さに招かれています。わたしたちは、自分自身の功績を通してではなく、完全なたまものの源である神（ヤコブ 1:17 参照）によって与えられるたまものにおいて豊かになるのだということを忘れてはなりません。ですから、わたしたちは神に感謝しなければなりません。自分の所有物に執着したいという誘惑に抵抗しなければなりません。初代教会の特徴の一つは、喜びと誠実さをもって、すべてを分かち合うという生き方でした（使徒言行録 2:45-46 参照）。初期のキリスト教共同体が、厳しい苦難と極度の貧しさの中にあっただけ、イエス・キリストにおいて、わたしたちのために貧しくなられた神の恵みに強められて、喜びと寛大さにあふれていたこともわたしたちは知っています（II コリント 8:1-9）。イエス・キリストのうちに、神がご自身を啓示してくださったことに対する喜びと感謝は、思いもよらない寛大さの模範によって強められながら、傷ついた世界への奉仕の最前線に立つために必要な安心感と自信を与えてくれます。
7. 愛——わたしたちは、キリストの愛を生き、キリストの顔を世界に示すよう呼ばれています。わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです（I ヨハネ 4:19 参照）。愛を生きるとは、キリスト教の真の顔を示すことです

(ヨハネ 13:35 参照)。たとえば、わたしたちがキリスト者として示す顔や、他の人々が描く顔が、愛することを困難にすることがあったとしてもです。わたしたちの信仰は、キリストの愛を生きる行動の中で、生き生きとしたものとなります。ですから、よりよい世界のためにも働くことは、いろいろなやり方で正義と平和と喜びの神の王国を建設することです。ともに働くことは、わたしたちの信仰と使命を活動的で生き生きとしたものに保ち、わたしたちキリスト者の生活をキリストの現存の愛のしるしとして形作り、そして、わたしたちの愛を行動で表現するためにも働く人々とわたしたちとの間に、愛と理解を築きます。苦しみを少しでも軽減するよう目指すとき、キリストを通して、キリストのうちに、わたしたちに約束された王国を目指しています。その国は、後にいる者が先になる国（マタイ 20:16 参照）であり、わたしたちの時代の帝国とはまったく異なるものです。

提 案

わたしたちはすべてのキリスト者に、以下の提案を考慮しながら、隣人に奉仕し、そして隣人とともに奉仕するよう呼びかけます。

1. 苦しみを証しし、それに目を向け、傷ついた人や弱い立場に置かれた人の声を排除したり黙らせようとしたりするあらゆる力に立ち向かい、この苦しみの背後にある体制や人々の責任を追及しましょう。
2. 今日、わたしたちの社会でさまざまなレベルで見られる排他主義のあらゆる兆候に対抗するために、相違を神からのたまものと見なす包括的な文化を促進しましょう。これは家庭生活の中から始め、他の社会制度を通して継続していく必要があります。そのために、健全で建設的なコミュニケーションを強化し、平和と連帯のメッセージをさらに発信するよう、責任をもったソーシャルメディアの使用を勧めます。
3. 霊性を通して連帯を育みましょう。祈り、断食、自制、施しなどの宗教的実践のうち、より広い世界が必要としているもの、苦しんでいる人と連帯するようにとのわたしたちへの呼びかけに気づき、どのようにしてより深く浸透させることができるかを考えましょう。
4. 共感する心を育み、傷ついた人々のために他者と協力して働くための最善の知識と手段を身に着けるよう、聖職者、修道共同体、男女修道者、信徒、司牧活動の協力者、学生たちの幅広い養成に取り組みましょう。
5. わたしたちもその一部である傷ついた世界を癒やす働きに、若者たちを参加させ、支援しましょう。理想を求める若者たちの姿勢と活力は、冷やかな事なかれ主義への対抗手段となりえます。
6. この文書が目指していることですが、さまざまな考えを受け入れる、包括的な対話の場を作りましょう。連帯に対する取り組み、動機、原則、提案を、他の宗教を信じる人々から学びましょう。そうすることで、わたしたちは理解と協力をより深めることができます。疎外された人々の声を聞き、尊重される場を確保し、帰属する場所を提供しましょう。異なるグループが愛と理解のうちに成長できるよう、とも

にすることができるプラットフォームを作りましょう。

7. 他の共同体・組織・機関との協力によって改善できることを明確にするために、進行中の取り組みと既存の強みを検証し、諸宗教連帯の取り組みとその過程を再構築しましょう。わたしたちは多様性をもつものとして創造されたのですから、その多様性を認めるかたちで取り組みを再構築してください。わたしたちの働きは、「自分たちの中にだけ」とどまりたいという誘惑に抵抗してこそ、人間性の成熟を反映することができます。傷ついた世界とともに奉仕することで、わたしたちは皆、隣人となるのです。

結 論

キリスト諸教派および諸宗教の連帯によって、わたしたちの信仰は人々を分断するのではなく、むしろ一致させる要素となることができます。他の宗教を信じる人や善意ある人と手を取り合って活動するとき、わたしたちは信仰的確信の中心にある平和、正義、そして相互関連性を具現化し、同時にこれらの価値観を再創造し、強化しています。

キリスト者にとって諸宗教の連帯とは、他者を愛するようにとのイエス・キリストの教えを生きる方法であり、神のみ旨である平和を実現するために他者と協力する方法でもあります。わたしたちが助ける人への愛、ともに働く人への愛、そしてわたしたちを助けてくれる人への愛を育むことは、神がわたしたちをそのような者として造ってくださった姿——神の像の担い手、他者とその像を共有する者——を十分に生きることができ多くの方法を生み出します。

わたしたちがキリスト諸教派および諸宗教の連帯を通して、COVID-19 によって傷ついた世界に奉仕することに自らを開くとき、わたしたちが従うかた、イエス・キリストの模範から力を得ることができますように。イエスは、仕えられるためではなく仕えるために来られました（マタイ 20:28）。善いサマリア人の愛と寛大さに倣って、弱い人、弱い立場に置かれた人を支え、苦しむ人を慰め、痛みと苦しみを和らげ、すべての人の尊厳を確保するよう努めましょう。心を広げて対話し、手を広げて連帯し、癒やしと希望に満ちた世界をともに築くことができますように。

表紙は Sister Judith Zoebelein, FSE（教皇庁諸宗教対話評議会）の構想によるもので、ハートを中心として連帯の手が描かれ、COVID-19 パンデミックや人間と地球を苦しめる他の問題によって負った傷を分かち合うことが表現されています。マスクは、コロナ危機にあって、いのちを守る人々の努力、犠牲、連帯、役割を象徴しています。

